滋賀県介護の魅力等発信部会
（令和４年度 第２回）

〇日　　時　令和４年９月30日（金）10：00～11：40
〇場　　所　WEB会議
〇出席委員　山岡委員（部会長）、中村真理委員（副部会長）、後藤委員、東委員、河岸委員、
岡戸委員、築地委員、中村勝弘委員
〇オブザーバー　（株）JR西日本コミュニケーションズ
〇議　　題
（１）令和４年度介護のしごと魅力発信事業について

１．議題（１）令和４年度介護のしごと魅力発信事業について

※資料１により事務局およびオブザーバーから説明

【部会長】
〇今年度の進捗を説明いただいた。ご質問等どうか。

【事務局】
〇滋賀レイクスとの協働の中で、しがけあを冠にした協賛ゲームの開催も検討いただいていたことについてもオブザーバーから報告いただけるか。

【オブザーバー】
〇協賛を集めるために当社と滋賀レイクスとで動いていたが、コロナ禍の影響もあって中々集まらず、ゲーム開催には至らなかった。

【事務局】
〇滋賀レイクスもこのプロジェクトの趣旨に賛同いただき、民間同士の協働を模索いただいていたこと、また、今後の協働も思っていただいているようなので、ここで紹介させていただいた。

【委員】
〇イベントについて、しがけあフェスタ連絡調整会議にも参画している中で、コロナの状況を見ると昨年よりは来場が多いと期待しているが、ぜひ中学高校大学生が足を止めるようなものにしたいと思っている。介護縁日をテーマにしているので、楽しい雰囲気を出したい。ユニホーム等によって統一感も持たせられると良い。

【部会長】
〇ユニホーム等は計画に入っているか。

【オブザーバー】
〇法被などの制作自体はできるが、全体費用との兼ね合いで、当初計画には入っていない。

【委員】
〇マンガストーリーの募集は、結果どれくらい集まったのか。

【オブザーバー】
〇15 件の応募があった。
〇話の内容として良いものはたくさんあったが、マンガにするという性質上、画にしやすいものとしにくいものがあるので、作家の先生も交えて３つまで候補を絞っていった。
〇マンガ化に至らなかった話も、県のホームページを利用するなど、何らかの形で紹介したいと思っている。

【委員】
〇ここ２か月は、コロナで現場が一番厳しい時期だったので、業界からの協力もままならない中、進めていただいて感謝している。
〇学生プロジェクトについて、学生の募集方法と現状の雰囲気を教えてほしい。学生が自ら参画する活動はとても良いと思う。極端な話、福祉系学科に進んでも別の業界へ就職する状況があるので、それを踏まえても良い企画と思う。

【オブザーバー】
〇募集については、びわこ学院大学短期大学部の山委員に相談のうえ、山委員から 1.2 年生に向けて募集いただき、10 名が手を上げてくれた。その後も２名程協力してくれる学生が増えた。少しずつ輪が広がって、主体的に取り組んでいく最中である。

【委員】
〇データで見るしがけあ企画のアンケート回答数について、企画としての数量としてどうとらえたら良いかは分からないのだが、そのあたりの状況をもう少し教えて欲しい。

【オブザーバー】
〇募集については、８月中旬から２週間募集して、80 人程度の回答だった。企画として成立させるために 100 人を目標にしていたので、しがけあフェスタ連絡調整会議にも協力を依頼し、募集期間を延長した結果 135 人まで応募いただけた。

【事務局】
〇アンケート時期は、コロナの波のど真ん中だったので、依頼するのも心苦しいようなタイミングになってしまった。
〇この回答数は言わば、介護業界内での認知度でもあると捉えていたので、その意味では多ければ多い方が良かったと思っている。
〇今現在は、その時とは状況は違うので、例えば再募集等すればさらに回答いただけそうか伺いたい。

【委員】

○確かに相当きつかった。私は応援事業をしているので余計にわかるが、情報を流せる余裕が無い事業所は多かったと思う。
○落ち着いた時ならまた反応は違うかなとは個人的に思う。

【部会長】
○データは既にまとまっているか。

【オブザーバー】
○グラフ化までには至っていないが、第２期更新の 11 月 11 日あたりに間に合わせるなら、追加募集は難しい。

【部会長】
○スケジュール的には厳しい。

【副部会長】
○主に若者をターゲットにしている中で、学生に参画いただいている件はとても嬉しい。我々が発信しても若者に中々届かない。
○主軸になる声を拾い上げながら企画して行けると良い流れになると感じた。

【委員】
○今年度は、多彩に企画を進めていることや難しいところを頑張っていただいており、ありがたいと思っている。

【委員】
○進捗状況という意味では、一生懸命やっていただいており感謝する。
○あえて言うならば、ターゲットにすえている若者世代について、若者世代というのも多種多様なので、それをどういう風に区切りながら、動的にそれを捉えて、戦略的にアプローチすることが、今後さらに大事になるだろうと思う。
○プロジェクトがかなり大きく、複数のプロジェクトが同時に動いているので、そのプロジェクト間の調整や重みづけを臨機応援にやるためにはどうしたら良いかが、課題になるのかなと思う。オブザーバーにおいてかなり精力を持ってやっていただいているが、効果を常時把握しながら、より臨機応変に対応いただけるようにお願いしたい。
○びわこ学院大学の皆さんは大変献身的にやっていただいていると感じていて、ありがたいことと思う。一方私自身が、同様の形で貢献できないかと打診を受けたが、全く身動き取れなかった。多数の学生をうまく動機づけて動いてもらうことが、少なくとも私の能力を上回るところが最近でてきている。直近の状況としてコロナ禍の影響はまずあるが、つまり学生と教員との関係性が昔とは変わっているということ。この十年間に普及したスマホの世界や学生たちの置かれている経済的状況など諸々のことがあって、実際に色んなことに向けて動いてくれる学生は非常に限られている。私自身も滋賀県の別のプロジェクトに、学生に頼み込んで動員している件があるが、正直それで手一杯という状況。おそらく学生という集団の心をどういう風に掴むのかというところに、私たちが今まで培ってきたノウハウとは違うもの

が必要になっていると感じている。今日の報告を聞いて、学生たちの動きに先回りをして種を蒔いていくことについて、むしろ考えさせていただいたように思う。

【部会長】

〇ちなみに、連合会内でコアメンバーとして参画している役員が、知り合いの龍谷大学社会学部現代福祉学科の非常勤講師と協働してそのゼミ生に働きかけをしているので、ここで共有させていただく。

【事務局】

〇今回、滋賀レイクスとの民間同士の繋がりが持てたので、Win-Win になるよう、例えば業界や職員の皆さんがこの機会にレイクスを応援しようとか、楽しんでいる雰囲気を出していただけると、より良い関係が築けると思う。

〇10 月 16 日の観戦に行かれる際も、しがけあのブースを SNS にアップしていただくなどの発信もしていただけるとありがたい。

２．議題（２）令和４年度の取組について

※資料２により事務局から説明

【部会長】

〇次年度も同規模の予算を要求していくということ。

〇自走については、以前の資料にもあったようなイメージか。

【事務局】

〇現在の事業実施主体は県であるが、当事者である介護業界が主体となっていくことが良いと考えている。

【委員】

〇肝は自走化というキーワード。最終目標がすなわち令和６年度ということではなく、令和６年度以降もプロジェクトが続くとしても、いずれは最終目標のようになっていかないといけない、ということか。

【事務局】

〇そのとおり。

【委員】

〇ある種ちゃぶ台返しのような話をあえてさせてもらうが、若者や介護人材というものをどうとらえるか。このふたつのことがどう繋がるのかについて、いよいよ考えても良いんじゃないかという気がしている。

〇私の認識では、当部会の設置目的には、介護事業者が、より適した多様で豊富な人材を確保したいというのがまずあって、そのために魅力という情報を発信することによって実現したいということだった。その際、より適した多様で豊富な人材というものを、若者だと仮置き

してここまで走ってきたと思う。

○一方で、より豊富で元気で当事者意識を持って戦える層というのは、むしろ私の世代でもある。私の同期や同年代には、リタイヤ生活に入っている人もいるが、体は元気だし、介護の当事者であり、そこから生まれる想像力も高いと思う。パソコンの使用能力もある。

○ということで、自走して行くことを将来にわたって考えるのであれば、もう少し広い年代や特に中高年をターゲットにしたような魅力発信と言うか、自分が社会に貢献している実感を持てる場として発信できるのではないかと思う。若者にこだわらない方が良いかもしれないね、という話。

【事務局】

○仰るとおりで、県の介護人材確保策全体としては、シニア層もターゲットとして捉えていて、いわゆる求人広告として様々な働き方の情報を提供したり、逆に事業所の側においてもその受け入れがマッチするように態勢を整備しているところ。また、情報発信は人材センターを中心に取り組んで行っているところ。

○魅力発信の若者部門として当プロジェクトを行っているという整理。

【委員】

○そこは切り分けない方が良いかもしれない。やはり魅力発信や広報活動というのは、求人求職とは違う次元でとても大事で、社会通念を変えるというというところに大きな意味がある。社会通念が変わるということに当たって、より多くの方に当事者意識を持ってもらう、あるいは当事者としてそこに関わってもらうというのが、社会的広報活動の重要な意味だと思う。

○中高年については求人活動のみにするというように切り分けないで、若者向け広報もあれば中高年向け広報もあるという感じで、介護の魅力を発信して行くということ自体については、分け隔てなくやっていった方が良いと思う。全体を見渡した意見として。

【部会長】

○オブザーバーから、今後に対する意見はあるか。

【オブザーバー】

○自走を実現するには広告の力を活用しながらも、滋賀県の介護問題を社会全体で取り組んで行く構図をつくるため、まずはしがけあの認知を向上させていく必要があると思っている。今年度はその基盤づくりとして、レイクスや学生とのコラボを企画した。

○一方で、今後の課題としては、現在の活動を点で終わらせないことが大事。今年度のコラボ企画で構築した関係を円に広げて行って、しがけあに賛同いただけるコミュニティを拡大して行く必要があると感じている。それを実現して行くためには、やはり介護業界の力が必要不可欠で、具体的には、介護団体同士のこれまで以上の繋がり強化や、各職員におけるしがけあの認知や共感の向上が必要。さらには、滋賀県の介護業界がひとつになって取り組んで行く姿勢が必要。

○ちなみに、データで見るしがけあのアンケート結果では、介護職員等 135 名の内、しがけあを認知されていた方は 27%だったので、インナーからの認知拡大が重要。

○発信力を強化していくという手立てとして若者の力を得ていくことが、現状はまだまだ必要。レイクスなどの企業や学生との関係も、県事業が媒介するだけでなく、介護業界との直接の関係を強めていくことも必要で、それによって認知も拡大して行けると思う。

【委員】

○自走ということについて、この話はそもそも私たちの課題なので、県中心に３年間取り組んで一つの区切りになるのは理解する。

○自走化した時の中心となっていくのが、この部会なのかわからないが、中心を作るには大きなエネルギーが必要。大人数で進められることと、少人数の方が良い時とがあるので、どういう風に組織と仕組みを作っていくかを、自分たちで作るために様々なアドバイスをいただいていきたい。

○予算的な問題で、同じ取組ができないことも出てくると思う。企業等の協力を得ることも簡単ではないので時間も必要。

【部会長】

○自走するための組織の準備は、来年度あたりからやっていく必要がある。

○事業所の各管理者としての業務もある中で、エネルギーを費やすことができるキーマンが必要と思う。

【委員】

○いつかは自走というタイミングはあると思うので、区切っていく必要もあると思う。ただし、コロナ禍の影響も注視しながら、これまでの取組が分解してしまわないようにしていければと思う。

○委員が言われたシルバー層の件を聞いていて、魅力発信は若者とシルバー層にも必要と思っていた。ある先生から、これまでシルバー人材センターから委託を受けていたヘルパー研修が、今年度は無くなってしまって、有能な方たちにアプローチする機会が失われてもどかしく感じていると聞いていたので、そこの掘り起こしも必要と改めて感じた。

【委員】

○自走化というのをこの先どうしていくのか難しいが、ただ単にお金の問題で企業に協賛を求めてもどこも出さないと思う。介護業界やしがけあとして一般の企業に対して何ができるのかというと、協賛企業の宣伝を一緒にやるという必要性が出てくると思う。そのためには、若者向けに SNS を活用するのはもちろんだが、もう少しメディア露出をしていかないと協賛企業のバックアップも叶わないのではないかと思う。今後はテレビ業界などを活用した発信も検討するのもひとつかなと思った。

【副部会長】

○職能団体の理事は色んな団体の役員を兼任していて、動きがとりにくいところがある。この部会が設置される前は、介護の日をターゲットに地味に取り組んでいたが、今回のプロジェクトによって違う観点からアプローチできたことを、引き続き上手く活用できたらと思う。

○各団体がバラバラにやってきたところを、ひとつになって取り組んでいこうという流れがで

きたので、これをさらに整理できると良い。

【部会長】

○各団体が一緒になってというのは今回が初めてのこと。介護福祉士会をはじめ各団体においてもこれまでから人材確保に取り組んできたが、一緒になってというのは素晴らしいことと思う。

【委員】

○県がここまで力を入れてくれたものをみんなでどう引き継いで行ったら良いか、私も不安に思いつつここまで参画してきた。

○委員が仰っていたように、コアメンバーが必要。コアメンバーが熱くあるべき中で、では誰がするかと言えば、ここに参画している方々だろうなと思う。

○お金の問題に関しても、まずは世間にもっと介護の世界というものを知ってもらわなければならないと感じている。メディアにももっと露出していくのが良いのではないかと思う。

○我々ケアマネジャーでは介護離職のことをとても考えているが、それについては利用者の家族だけではなくて、私たちや介護職自身も同様であると思っている。そういうことも取り上げると、企業においても自分たちの人材の離職について考えてくれると思うので、介護はそこにもプラスになるんだよと訴えていくこともできるのかなと思う。

○働く年齢に関して、築地委員がお仰ったように上手くすればまだまだ長く働けて生き生きできるので、そうした姿を若い人達にも見てもらって将来を前向きに感じてもらえたら嬉しい。

○各団体において、仕事も厳しい、予算も厳しい中でやっているが、本当に介護が身近な世の中になっていて、そこをもっともっと広い世代に知ってもらうためにこちらから発信していかないといけないと思うので、当協会としても是非協力していきたい。

【委員】

○自走に関しては、お金など色々な問題はあると思うが、副部会長が仰ったように各団体が集まってイメージ変えて行こうという協力態勢が取れた。どこかの団体が受託するのか、どのような形になるかわからないが、いずれにしてもみんなが協力し合えるようにやっていくことが一番大事。

○お金に関しても福祉業界はバラバラであるが、実はそのお金や人を一か所に集めると物凄い規模になり、訴える力にもなる。それを踏まえた中で介護の魅力を発信して行ければ良い。

○若者をターゲットにしていくにしても、今までにないようなことをみんなでチャレンジして行ければと思うし、この取組を無くさないように継続してできる形をみんなで考えて行ければと思う。

【委員】

○趣旨を私なりに再度整理しながら聞いていたが、要するに今、毎年1,500万円の予算があり、それを使って業界の皆さんにまとまりができてきたという意味で大きな成果が挙がっているということ。

○今後、そのまとまりを長期にわたって持続させようとするにあたって、同じことを毎年やり

続けるならば毎年1,500万円必要になるが、その1,500万円を業界全体として集められるならそれでやっていけるし、もし人をひとりでも雇う必要があるのならプラスアルファで2,000万が必要になる、といったように考えていくと具体的な数字が見えてくると思う。

〇一方で、実際に業界内で集められる資金はいくらなのかを具体的に皆さんで詰めて行かれると、その金額をどう活かしていくかという話になる。まずは、そうした収支をリアルに把握したうえで、何ができるか、何をすべきかを考えて行かれると良いと思う。

〇いずれにせよ、自走化の言葉の重みを皆さんで共有されたと思うので、自走するというのは具体的にどういうことなのかを考えていく必要がある。例えば、当部会事務局担当者のような役割の人員を事務局長に配置して、プロジェクト団体のようなものを起こしたりなどを考える必要もあるということ。

【部会長】

〇大きな話の方向性は再確認できたと思う。

〇令和５年度に対しては今年度と同規模の予算を要求し、内容はブラッシュアップして行くことに加えて、その先のことも考えた道筋を付けていくということで進めていく。

【事務局】

〇今後のターゲットのことや自走化など大きな論点について、課題等の共有ができたと思う。それについては、事務局でも引続き検討したいと思うし、皆様とも一緒にとも思っているのでよろしくお願いしたい。

〇近い話では、しがけあサイトの認知度をもっと高めていく必要があるということだったので、まずはそれを如何に業界内からも高めていくかが大事と思っているので、よろしくお願いしたい。

以上